

平成20年度 安芸高田市の財務四表の概要 (普通会計)

現在の地方公共団体の公会計制度は、その年度にどのような収入があり、それをどのように使ったかといった現金の動き(フロー情報)が分かりやすい反面、市が整備してきた資産や借入金などの負債といったストック情報や、行政サービス提供のために発生したコスト情報の不足といった弱点がありました。

企業会計的な手法を取り入れ、それらの弱点を補うのが国が推奨する「新地方公会計制度」の財務四表です。

市民1人当たりの資産は、	306万4千円
市民1人当たりの負債は、	114万9千円
市民1人当たりの行政コストは、	57万4千円

新地方公会計制度(公会計改革)の概要

- 1 全ての地方公共団体は、総務省が示した2つの公会計モデル(基準モデル又は総務省方式改訂モデル)のうち、いずれかを選択し、市の一般会計だけでなく、特別会計や関連団体まで含めた連結ベースの財務四表を整備する。
【財務書類四表】 貸借対照表、行政コスト計算書、資金収支計算書、純資産変動計算書
- 2 地方公共団体は、平成21年度中に財務四表を作成し、その財務情報を開示する。

公会計改革への安芸高田市の対応

公会計モデルは、総務省方式改訂モデルを採用
 【採用理由1】多くの自治体が採用するため、比較検討が可能
 【採用理由2】資産情報の整理を段階的に進めるため、早期に公会計改革への対応が可能

貸借対照表

貸借対照表とは、市の施設、市の所有する現金や債権、資産形成のために投資された資金などが、どのくらいあるかを示したもので、資産、負債、純資産の3つの要素で構成されています。表の左右の合計が等しくなることから、バランスシートとも呼ばれています。

資産	1,064億円
市が所有している財産の内容と金額です。行政サービスの提供能力を表しています。	
(内訳)	
1. 公共資産 (道路、公園、学校、庁舎など)	993億円
2. 投資等 (基金、出資金など)	53億円
3. 流動資産 (現預金、財政調整基金、市税未収金など)	18億円
うち歳計現金	4億円

負債	372億円
借入金(地方債)や将来の職員の退職金など、将来世代の負担で返済していく債務です。前年度から、21億円減少しました。	
純資産	692億円
現世代が既に負担して、支払いが済んでいる正味の資産です。	

資金収支計算書

1年間の市の現金の収入(歳入)と支出(歳出)がどのように増減しているかを性別別に区分して整理したものが、資金収支計算書です。

期首(H19年度末)資金残高	3億円
----------------	-----

当期収支(20.4.1~21.3.31)	1億円
(内訳)	
1. 経常的収支	51億円
2. 公共資産整備収支	5億円
3. 投資・財務的収支	45億円

期末(H20年度末)資金残高	4億円
----------------	-----

純資産変動計算書

市の純資産(正味の資産)が、平成20年度中にどのように増減したかを示します。

期首(H19年度末)純資産残高	701億円
-----------------	-------

当期変動高(20.4.1~21.3.31)	9億円
(内訳)	
1. 純経常行政コスト	180億円
2. 財源の調達(地方税等)	171億円

期末(H20年度末)純資産残高	692億円
-----------------	-------

行政コスト計算書

市の行政活動は、福祉や教育などの人的サービスや給付サービスの提供など、資産形成につながらない行政サービスが大きな比重を占めています。

そのためのコストがいくらかかっているかを整理したものが、行政コスト計算書です。

平成20年度の市の1年間のコスト総額は、186億円で、市民1人あたりの平均では、57万4千円です。

経常行政コスト(A)	186億円
------------	-------

(内訳)	
1. 人にかかるコスト (職員給与、退職手当など)	47億円
2. 物にかかるコスト (物品購入、光熱水費、修繕費、減価償却費など)	73億円
3. 移転支的コスト (社会保障給付、補助金など)	61億円
4. その他のコスト (地方債の利子など)	5億円

経常収益(B)	6億円
---------	-----

行政サービスの利用や市民が直接負担する施設の使用料や手数料などです。

地方税は、純資産変動計算書の「2.財源の調達(地方税等)」に計上しています。

純経常コスト (A) - (B)	180億円
---------------------	-------

経常行政コストから経常収益を差し引いた純粋な行政コストです。

平成20年度 安芸高田市の財務四表の概要 (連結ベース)

市では普通会計で行っている事業のほかにも、水道事業、下水道事業、国民健康保険事業など、市民の皆様と親密な事業を行っています。また、こうした市自らが行う事業とは別に、公益法人など関係団体を通じて行う事業もあります。

このように、市の財政は普通会計のみで成り立っているのではないため、真の安芸高田市の姿を把握し、分析するには、普通会計に加え、公営企業会計及び市が一定割合以上を出資している関係法人等までを対象とした連結財務書類が必要になります。なお、連結に際しては、各会計間、法人間などは、連結グループ内の内部取引として相殺消去しています。

安芸高田市の連結範囲

連結グループ

市全体

普通会計

一般会計
コミュニティプラント整備事業
特別会計
飲料水供給事業特別会計

国民健康保険特別会計
老人保健特別会計
介護保険特別会計
介護サービス事業特別会計
後期高齢者医療特別会計
公共下水道事業特別会計
特定環境保全公共下水道事業特別会計
農業集落排水事業特別会計
浄化槽整備事業特別会計
水道事業会計

広島県後期高齢者医療広域連合
芸北広域環境施設組合
市町総合事務組合
安芸高田市土地開発公社
財団法人八千代開発公社
財団法人安芸高田市地域振興事業団
安芸高田市アグリフーズ株式会社
株式会社虹の農場
株式会社神楽門前湯治村

連結貸借対照表

連結対象の各会計・団体・法人を1つの行政サービス実施体とみなし、安芸高田市全体の資産や負債のストック情報を網羅した財務書類が連結貸借対照表です。

資産 1,506億円

連結ベースでの市が保有している財産の内容と金額です。

(内訳)
1. 公共資産 1,413億円
(道路、学校、庁舎、上下水道施設など)
2. 投資等 62億円
(基金、出資金など)
3. 流動資産 30億円
(現預金、財政調整基金、市税未収金など)
うち資金 26億円
4. 繰延勘定 1億円

負債 528億円

連結することにより、下水道事業などでの借入金などが加わっています。

純資産 978億円

現世代が既に負担して、支払いが済んでいる正味資産です。

市民1人当たりの資産は、464万5千円 (普通会計では306万4千円)
市民1人当たりの負債は、162万8千円 (普通会計では114万9千円)
負債割合が大きくなっているのは、下水道事業での社会資本整備に必要な資金調達に、地方債を活用していることなどが原因としてあげられます。

連結資金収支計算書

連結グループの1年間の収支の実態を表すのが、連結資金収支計算書です。

期首(H19年度末)資金残高 21億円

当期収支(20.4.1~21.3.31) 5億円

(内訳)
1. 経常的収支 59億円
2. 公共資産整備収支 7億円
3. 投資・財務的収支 47億円

期末(H20年度末)資金残高 26億円

連結純資産変動計算書

連結ベースでの市の純資産(正味の資産)が、平成20年度中にどのように増減したかを示します。

期首(H19年度末)純資産残高 984億円

当期変動高(20.4.1~21.3.31) 6億円

(内訳)
1. 純経常行政コスト 221億円
2. 財源の調達(地方税等) 215億円
3. その他等 0

期末(H20年度末)純資産残高 978億円

連結行政コスト計算書

行政コスト計算書の考え方を連結対象の特別会計や公益法人に適用し、1つの行政サービス実施体とみなして作成したものが、連結行政コスト計算書です。国民健康保険や介護保険など、市が行う福祉目的事業の中には特別会計で行われているものも多いため、移転支出的コストの割合が高くなっています。また、経常収益が大きくなっているのは、企業会計や特別会計が原則受益者負担でまかなわれるべきものだからです。

経常行政コスト(A) 320億円

(内訳)
1. 人にかかるコスト 55億円
(職員給与、退職手当など)
2. 物にかかるコスト 99億円
(物品購入、光熱水費、修繕費、減価償却費など)
3. 移転支出的なコスト 146億円
(社会保障給付、補助金など)
4. その他のコスト 20億円
(地方債の利子など)

経常収益(B) 99億円

施設使用料や手数料のほか、国民健康保険料、介護保険料、上下水道料金が含まれています。

地方税は、純資産変動計算書の「2.財源の調達(地方税等)」に計上しています。

純経常コスト (A) - (B) 221億円

経常行政コストから計上を収益を差し引いた純粋な行政コストです。